４月２０日（日）特別活動「相生口竹林の春期管理」

眞弓　浩二

４月は草木萌え、命がみなぎる雑木林の季節。相生山オアシスの森にもみずみずしい黄緑色の世界が広がっています。そんな森のエネルギーを感じる代表的なものが「筍」ではないでしょうか。オアシスの森にもいくつかの竹林がありますが、昨年より管理作業を進めている「相生口の竹林」で春期の管理をしようと計画しました。竹林の春期管理とは、今年残す竹を選定することが主な目的ですが、あいにくの雨模様で参加者はゼロ。仕方なく一人で小雨降る中、昨年出た竹に年号を記入する作業をおこないました。モウソウ竹林は一般的に５年目の竹を伐りながら一定の本数を維持していきます。そのためタケ年齢の記入はこれを確実に進めるために必要な作業といえます。昨年は筍の盗掘対策を講じたおかげで新筍が林立しました。これにエネルギーを使い果たしてしまったのか、今年は筍の発生も遅く、本数も少ないように感じました。しかし各地の竹林の様子をお聞きすると、この傾向は同様のようです。４月２６日午後の定例活動では伊藤（晶）さんにも手伝っていただき、ほぼ全域のタケ年齢を記入することが出来ました。

◀小雨に煙る相生口の竹林

２月定例活動「鳥の来る森、来ない森」

近藤　眞史

２月22日の定例活動は、種の多様性を確保する森づくりの一環として、野鳥に着目した講習会が行われました。講師は日本野鳥の会愛知県支部会員の古澤氏にお願いし、野鳥観察や巣箱の清掃を行いながら、一日森の中を歩き回りました。

この日はあいにく曇りのち時々雨という予報で、野鳥観察にはやや不都合な天気でしたが、十数名の参加者には定価５５０円の「野鳥観察ハンディ図鑑～山野の鳥～」がたったの５０円という破格値で配られ、さらに古澤氏が用意してくれたプリントを見ながら、まずはつどいの広場でミニ講義を受けました。

その中で、鳥の餌となる実や種のつく木を大切にすること、鳥の嫌う光を遮る茂みを残すことなど、森の植生管理をしていく上での注意事項をうかがいました。また、鳥を見分ける方法として、スズメ（体長約14.5cm）やムクドリ（約24cm）、キジバト（約33cm）といった馴染みの深い鳥を基準にしたり、波状飛行（波を描き上下しながら飛ぶ）や滑空など飛び方の違いを見ると覚えやすいということなどを教えていただきました。さらに、鳥が安心できる安全距離として25m程度が目安となり、巣箱を設置する際にも人の通り道の間際ではなく、なるべく離れたところの方が望ましいというお話も頂きました。

コゲラ

その後、午前中は相生口方面に向かい、図鑑や双眼鏡を片手に野鳥を探しながら森を抜け、周辺の畑にも出かけました。残念ながら特に珍しい鳥には出会えませんでしたが、それでもコゲラやジョウビタキ、ルリビタキといった可愛らしい野鳥も見ることが出来ました。

午後は以前設置した巣箱のうち予め古澤氏が下見をして見つけて下さった９つの巣箱を清掃しました。いずれも２年以上放っておかれていたため、ほとんどがハチの巣箱と化していました（冬でハチの動きが鈍く危険はありませんでしたが・・・）が、それでも多くの巣箱に鳥が営巣した形跡も残っており、卵の殻が残されたものもありました。清掃した後の巣箱は、鳥が安心して営巣できるよう、人の通る道からやや奥に設置し直しました。

ちなみに、巣箱の掛け下ろしのためにハシゴも用意しましたが、ややコツが必要ながら竹竿でも充分にでき、その点では巣箱の維持管理もそれほど大変ではないと感じました。（いくら軽量とはいえ、ハシゴをかついで森を歩き回るのは大変ですもんね。）やはり年に１回程度は清掃が必要だそうなので、また来年もこのような活動をしたいですね。

ジョウビタキ

＊＊＊　「森の住人たち」はお休みです。毎号楽しみにしている皆さんごめんなさい。　＊＊＊